

1

研究会 「古くて新しい学術資産 —東京大学の埋蔵文化財—」 講演録

概要

日 時：2019年3月8日12：30-15：00

場 所：東京大学本郷キャンパス 情報学環福武ホール内 史料編纂所大
会議室

講演者：堀内秀樹（本学埋蔵文化財調査室准教授）

コメンテーター：松田陽（本学人文社会系研究科准教授）

司 会：鈴木淳（本学人文社会系研究科教授）

本講演録作成にあたり、まず市太佐知（本学人文社会系研究科修士課程）が音声データから文字起こしした原稿を校閲・補註し、一色大悟（本学ヒューマニティーズセンター特任助教）が体裁を整え、草稿にまとめた。さらに、その草稿に講演者・コメンテーター・司会が補訂を加え、質問者にも確認の上で定稿とした。なお、講演録中に記された各人の所属は、研究会当時のものである。

1, 研究会趣旨説明

○鈴木 本日は東京大学ヒューマニティーズセンター企画研究「学術資産としての東京大学」研究会「古くて新しい学術資産—東京大学の埋蔵文化財—」にご来場いただき、誠にありがとうございます。私は、東京大学文学部

日本史学研究室の鈴木淳と申します。東京大学ヒューマニティーズセンター LIXIL Ushioda East Asian Humanities Initiative (LIXIL 潮田東アジア人文研究拠点) では、株式会社 LIXIL グループおよび潮田洋一郎氏 (同グループ取締役代表執行役会長兼 CEO) の財政的支援により、部局の枠を超えた文系学問の交流と振興を一つの大きな課題としております。

東京大学の各所で「学術資産」というキーワードが使われるようになってきました。ですが、学術資産にも様々な捉え方があり、各分野で何を学術資産と捉えているか相互理解できていない部分があります。この状況の中で学術資産について相互理解を深めることは、文系学問の分野を超えた交流を進める上で、非常に重要なテーマではないでしょうか。「学術資産としての東京大学」をどう捉えるかについて相互理解を深め、その知見を各分野の将来に活用する方途を考えるために、本企画研究ではこれまで仏教学や大学史、建築物について研究会を重ねてきました。

本日は、目には入りにくいけれども実は東大が持っている大きな資産である、埋蔵文化財を取り上げます。まず東大構内の埋蔵文化財調査に長年携わってこられた堀内秀樹先生にご講演を賜ります。さらに、文化資源学の松田陽先生にそれに対してコメントしていただき、その後はお集まりの皆さんからご質疑を承ります。

それでは、堀内先生、よろしくお願いいたします。

2、「古くて新しい学術資産—東京大学の埋蔵文化財—」 (堀内秀樹)

○堀内 皆さん、こんにちは。ご紹介にあずかりました埋蔵文化財調査室の堀内です。埋蔵文化財調査室は、あまり耳慣れない言葉かもしれませんが、学内で発掘調査を行う学内組織です。そこで私は1984年から三十五年にわたって、学内調査を担当しています。

今日は、学内の埋蔵文化財調査についてお話いたします。ですが一時間

で三十五年間分すべてを話すのは難しいので、具体的な例を若干示しつつ、発掘で出てきた史料をどう考えていくのか、また、それを取り巻いている学内と社会の環境がどう変化していったのかを中心に説明いたします。

スライド背景に用いている写真（図1）は、学内から出土した金箔を押した瓦です。梅鉢紋といいますが、前田家の家紋が入っており、前田家に将軍家が御成をした際に建てた建物の屋根に葺かれていたと考えられます。



図1 「加賀藩邸出土金箔瓦」写真提供：東京大学埋蔵文化財調査室

埋蔵文化財の発掘に関する原則

今日の研究会のタイトル「古くて新しい学術資産—東京大学の埋蔵文化財—」には、埋蔵文化財という言葉が含まれています。あまり耳慣れないと感じられる方が多いかと思しますので、この言葉の説明から始めましょう。

埋蔵文化財とは、地中に埋蔵している文化財ではありますが、地中に埋蔵され、遺存しているもの全てを指すものではありません。埋蔵文化財という言葉の大まかな共通の認識としては、土地に埋蔵されている文化財としての価値が認められる「遺構」と、文化財としての価値が推定される、民法第241条¹の「埋蔵物」としての「遺物」があります。通常、文化財指定を受けるには、評価を踏まえた上で重要であるかの判断をし、重要なものに対して指

1 民法第241条（埋蔵物の発見）「埋蔵物は、遺失物法の定めるところに従い公告をした後六箇月以内にその所有者が判明しないときは、これを発見した者がその所有権を取得する。ただし、他人の所有する物の中から発見された埋蔵物については、これを発見した者及びその他人が等しい割合でその所有権を取得する。」

定するという過程を踏みます。例えば文書資料であれば、その内容が非常に歴史的に重要な意味を持つものに対して文化財指定がかかっていくということになります。

一方、埋蔵文化財の場合、掘って見ないと何が出るかわからず、重要かどうか事前に判断できません。そこで埋まっているものが文化財ではない、もしくは重要ではないという前提で開発を行ってしまうと、すべて失われてしまいかねません。そのため、「周知の遺跡」という呼び方をしますが、あらかじめ遺跡であることの指定をしておきます。ちなみに、本学は本郷キャンパス全域、駒場キャンパス全域、学内の研究所等々の中の一部が遺跡指定されています。これからお話をする各地の大学の校地にも遺跡指定されている所が多くあります。遺跡指定された場所で開発を行う際、事前に発掘調査することになります。その調査で出土した遺物は、まず拾得物と同じような扱いになります。

本学本郷キャンパスの場合、近世では出土物の落とし主は明らかです。これは土地の所有者であった前田氏の関係の誰かが落としている、もしくは捨てているわけです。そこでもし、子孫の方が自分のものだと主張すれば、拾得物として返さなければならぬこともありえます。

話を戻して、発掘調査の対象を定めた原則について説明しましょう。1988年9月、文化庁から都道府県教育委員会教育長宛の通知²が出されました。埋蔵文化財の保護という名目の開発をするときに記録保存という形での発掘調査が行われるのですが、その円滑化についての通知です。その中に埋蔵文化財として取り扱う範囲に関する原則があります。ここには「おおむね中世までに属する遺跡は、原則として発掘調査の対象とする」、つまり中世までの時代の遺跡は、すべて発掘調査をすることになっています。次に「近世

2 1988年9月29日付文化庁次長による都道府県教育委員会教育長あての「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について（通知）」

「4（1）「埋蔵文化財として扱う範囲に関する原則」

おおむね中世までに属する遺跡は、原則として対象とすること。

近世に属する遺跡については、地域において必要なものを対象とすることができること。

近現代の遺跡については、地域において特に重要なものを対象とすることができること。」

に属する遺跡については、地域において必要なものを対象とすることができる」、「近現代の遺跡については、地域において特に重要なものを対象とすることができる」とあります。

この東京大学の地下には、有名な遺跡である弥生遺跡に加えて、赤門をはじめとした加賀藩の関連施設も遺跡化して良好な状態で眠っています。加賀藩関連施設が機能した時代というのは近世です。ですから、その遺跡が地域において必要なものかどうか判断が行われ、もし不要だと判断されれば、発掘調査されることなく開発などによって壊されることになります。ただし東京の旧十五区—これはおおむね墨引線と呼ばれる江戸町奉行の管轄範囲内ですが—中の開発行為については、厳密に規定されてはいないものの、多少の配慮がなされています。しかし、全部を遺跡にして必ず発掘するという扱いではありません。つまり、本郷キャンパスの中はすでに遺跡として周知されていますが、発掘調査の実際は遺跡の時代によって扱い方が違うことがあるわけです。

ちなみに本郷キャンパス内は、「文京区NO.47 本郷台遺跡群」として旧石器、縄文、弥生、古墳、平安、近世という名目で登録されています。その他に国の名勝である懐徳館庭園（旧加賀藩主前田氏本郷本邸庭園）が、近世ではなく近代のものではあるのですが、例外的にこの遺跡群の中に含まれています。今回は詳しく話しませんが、弥生二丁目遺跡群も国の史跡として登録されています。駒場キャンパスは「目黒区NO. 1 東京大学駒場構内遺跡」として旧石器、縄文、平安、近世で登録されています。

後ほどお話しますが、2014-15年に調査をした本郷キャンパス旧図書館前の遺構は近代のもので、東京都にお伺いを立てたら発掘しなくてよいという答えが返ってくるでしょう。ですが、これは大学にとって重要なものでしたから、最初から壊してしまうのではなく、ある程度配慮した発掘調査をすることが選択されました。出土した遺構は、部分的ではありますが、現在図書館前に移築されて残っています。

弥生土器の発掘と学内の近世遺構調査

学内の発掘調査は、1984年から突如始めたものではありません。

有名な話ですが、今から百数十年前、1884年に弥生土器が発見されました。発見された土器がすぐに報告されたのではなく、数年後に発見者の一人であった考古学者の坪井正五郎が紹介報告をしました³。この土器は、美術的・歴史的価値という点で言えば普通の土器ですが、学術上の位置は非常に重要です。以降の考古学の研究にとってのエポックになるような資料ということで、重要文化財に指定されています。

ただし、この弥生土器は発掘調査によって得られたものではなく、専門用語でいえば表採、つまり拾って採取した土器です。そのため正確な採取場所が長い間不明でした。その一方で、東京都は弥生土器発見場所を史跡指定したいという意向を示していました。その状況の中、1975年に現在の工学部九号館の裏側に当たる部分を工事することになりました。当時場所が不明だった弥生土器関係の遺跡が発見される可能性があったため、発掘調査を行いました。この調査によって弥生時代の遺跡、遺物が確認され、その翌年、国指定の史跡として登録されました。発掘から四年後の1979年に『向ヶ岡貝塚』という名前で報告書が刊行されています。

この弥生時代の一連の調査とその成果が、以後のキャンパス発掘調査に少なからず影響していることは間違いありません。1983年に東京大学百周年事業の一環として、御殿下グラウンドと山上会館の建築が計画されましたが、その開発の事前調査として試掘が行われました。

こういった機運の中、当初発掘の目的とされていたのは新しい江戸時代の遺跡ではなく、古い弥生時代のものでした。ところが試掘調査をしたところ、1983年8月、御殿下グラウンドからは江戸時代の焼き物と非常に堅牢な建物の礎石が重層的に出土しました。1983年9月、今度は山上会館の建設予定地も試掘したところ、金箔瓦と石垣等が出土します。こうして近世大名で

3 坪井 [1889].

ある前田家の屋敷が非常に良好に遺存していることがわかり、近世を主たる発掘対象として学内調査が開始されることになりました。

その年の年末にかかった時期に臨時遺跡調査委員会が立ち上がり、その下部組織として発掘調査を担当する遺跡調査室が組織されました。1984年から1985年にかけて、山上会館、御殿下グラウンド、総合図書館前の噴水を挟んで東西に建つ法学部四号館と文学部三号館、医学部附属病院（現在の病院の中央診療棟として機能している部分）、理学部七号館に対する一連の発掘調査が、ほぼ同時に開始されました。東大構内発掘調査の写真を二、三お見せしましょう。

この写真（図2）は、現在御殿下グラウンドがある場所の発掘状況を、東京大学医学部附属病院から安田講堂を望む方向で撮影したものです。手前が現在のバス通りです。加賀藩の御殿が非常に明瞭に良好な形で出土しました。

この写真（図3）は、総合図書館前の噴水がある場所です。噴水の周りにぐると煉瓦の基礎があり、画像の左下にはコンクリートの基礎が巡らされています。この基礎は、関東大震災で被災した旧図書館のものです。この古写真（図4）は、現在の法学部三号館のほうから旧図書館を撮ったものです。玄関部分が少し建物から出っ張っていますが、この玄関部分の基礎が前の写真の噴水左横にあたります。ここでの発掘調査は、人の往来が非常に多い場所であることに鑑み、あえて調査風景が見えるようにして行いました。

この写真（図5）がどこだかお分かりになるでしょうか。左上が弥生門で、発掘場所は弥生門に入って正面、工学部三号館が建っているところで、右側に小柴ホール（理学部一号館）があります。この写真は、工学部二号館の下駄を履かせたような建物の上から撮っています。2011年、ちょうど東日本大震災の時に発掘調査を行っていました。この発掘場所の中央は、現代の三四郎池から出てきた水が画像右の小柴ホール側から弥生門側に流れ出していた水路にあたります。発掘現場の脇には約一万年前にできた火山灰の関東ローム層が認められますが、水路に当たる中央部分は黒っぽい谷を形成しています。

この工学部三号館発掘では、点々とコンクリートの巨大な基礎と、発掘場所右側に見える煉瓦の基礎が出土しました。旧工学部三号館の基礎と、その前、明治期の旧動物学植物学教室跡です。この写真(図6)には煉瓦の基礎が鮮明に写っています。谷にかかる部分なので、非常に堅牢に造られていました。この基礎については詳細に発掘調査を行いたかったのですが、前述のとおり近代遺跡が発掘対象になっていなかったため、不十分なデータしか残せないまま、基礎を壊してしまいました。

これは、井戸杵と、井戸桶の写真(図7)です。この写真(図8)では、食べていた貝殻、土瓶や鍋や碁石など、当時の藩士の生活道具がまとまって出土しています。当時、谷にどんどんゴミを捨てていたことがわかります。さて、江戸時代の発掘調査と聞くと、よく「小判や埋蔵金が出ますか」と聞かれますが、残念ながら小判ではないですが、この場所では珍しく一分金が出てきました。

この写真(図9)は、明治の終わりに旧前田侯爵が明治天皇を呼ぶために建てた洋館の遺構です。建物は、東京大空襲の時に焼けてなくなってしまいました。建物の平面図でみると、出土したのは建物の角の、トイレにあたる部分の基礎でした。四畳半より広いトイレです。その基礎の一部は、懐徳門という本郷キャンパスの門の脇に展示されています。

焼失した洋館がもし現存していたら、文化財としての価値があると誰もが評価するでしょう。ですが、そのトイレの部分の基礎はどう判断されるのでしょうか。これは「なくなってしまったもの」なのでしょうか、それとも「残っているもの」なのでしょうか。

また、文化財としての価値がどの時代から発生するかについて、よく学生と議論します。例えば、古くなったから捨ててもいいという判断は、どれぐらい前までか。もしくは、昔のものだから大事だから取っておこうという時代はどこからか。古い、珍しいから大事なのか。新しい、普通だから大事ではないのか。もちろん考え方はさまざまですけれども、今後どういったものを大学の資産として評価していくかが課題になるでしょう。



図2 「御殿下記念館の発掘調査」
写真提供：東京大学埋蔵文化財調査室



図3 「アカデミックコモンズの発掘調査」
写真提供：東京大学埋蔵文化財調査室



図4 「東京帝国大学附属図書館写真
(明治42年4月)」
写真提供：東京大学附属図書館



図5 「工学部3号館の発掘調査」
写真提供：東京大学埋蔵文化財調査室



図6 「動物学植物学教室のレンガ基礎」
写真提供：東京大学埋蔵文化財調査室



図7 「加賀藩邸出土の井戸」
写真提供：東京大学埋蔵文化財調査室



図8 「藩士の使った生活用品や食物残滓」
写真提供：東京大学埋蔵文化財調査室



図9 「懐徳館洋館のレンガ基礎」
写真提供：東京大学埋蔵文化財調査室

各キャンパスの発掘調査状況

2019年2月末現在までに、本郷キャンパスで二百七十地点、駒場キャンパスで五十六地点、その他の地点で三十二地点の発掘調査が行われています。この図（図10）は、本郷キャンパス内の主要な発掘調査を掲載したものです。

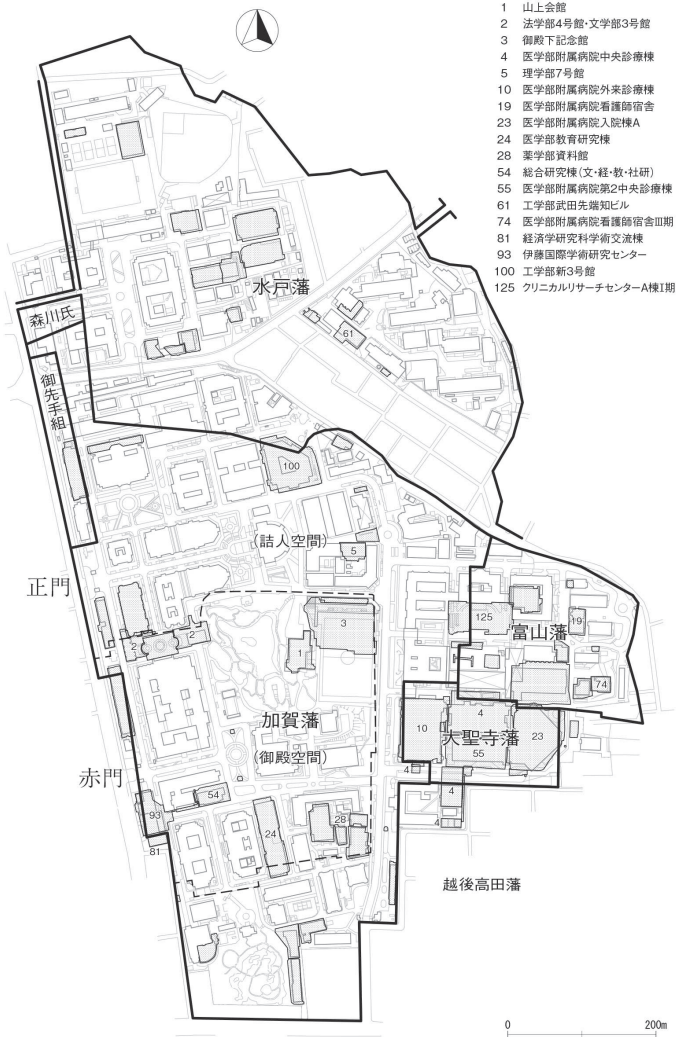


図10 「本郷構内の主な発掘調査地点」
 東京大学埋蔵文化財調査室作成

幕末の土地利用の状況も同時に示しておきました。

評価されるべきは、本郷キャンパスの地下には良好かつ膨大な歴史的な情報(埋蔵資料, 埋蔵文化財)が大きな破壊をされずに保存されていることです。例えば、本郷三丁目駅から大学まで歩いていくと、本郷通りの両側にはほとんどビルが建っています。ビルが建てられているということはすなわち、その基礎によって地下までかなり深く掘られてしまって、遺跡は全く残っていないことになります。本郷通りには、「白糸」、その隣には「ぎおん」という飲み屋があります。そういったところは木造の建物なので、まだ地下に埋蔵品が残っているでしょう。その何軒か先に、かつては木造のそば屋がありました。現在は鉄筋コンクリートに変わってしまっていますが、その建設の際に発掘調査は行われていません。なぜ行われなかったかという点、近世に対しては発掘調査が必須ではないからです。

このスライドは、本学の各地区がどの時代の遺跡として調査されてきたかをまとめたものです。本郷キャンパス、駒場キャンパスについては先述のとおりです。

白金キャンパスは、旧石器、縄文、近世の遺跡として調査対象になってきました。ところがここは伝染病研究所の所在地、つまり北里柴三郎が初代の所長となり重要な研究がなされた、日本で唯一の場所⁴です。ですので白金キャンパスの発掘調査では、一番表層を剥ぐと、アンプルや注射器が三、四十センチも層をなして出てきました。

こういう場合、近現代に対する発掘ならではの制約もあります。ペスト室とコレラ室と当時の図面に書いてある所に注射器のような遺物があると、もちろん寄生するものが死に絶えてしまえば病原菌も死んでしまうとはわかっているんですけど、嫌ですよ。作業員さんたちも触りたがらない状況だったので、結果として休み時間に僕が拾い集めたものしか持って来られませんでした。

4 1892年に福沢諭吉が北里のために建てた伝染病研究所は芝公園に所在したが、1899年研究所が国に寄付され内務省管轄の国立伝染病研究所となり、1906年白金台に移転。

そのほかにこれまで発掘調査をした主な地点は、千葉県稲毛の検見川総合運動場、三鷹学寮、追分学寮、三浦の三崎臨海実験所などです。

考古学の展開と近世

次に、本学構内の発掘調査が学術史上において持つ意義について説明してゆきたいと思います。

従来の考古学は、文書記録の少ない時代、地域などを主な研究対象としてきました。発掘調査でもこういった地域を中心に行ってきたのも事実です。しかし、例えば北海道はどうでしょうか。近世では、日本ではふんだんに書物があるとイメージするかもしれませんが、ですが、北海道に住んでいるアイヌの方々は文字を持っていませんので、近世の状況を、彼らが記した文字で知ることはできないわけです。

また、台湾も同じです。1624年にオランダが台湾に上陸します。その前までは、現在、原住民といわれる人たちが居住していました。彼らは字を持っていませんので、17世紀初頭までは全く字のない世界がありました。今の台湾は中国語を話す人たちが住まい、中国の歴史に組み込まれている雰囲気がありますけれども、実際はそういう歴史的背景を持っています。

本郷キャンパスはどうでしょうか。確かに近世になれば、文字資料がたくさんあるでしょう。ですが、先ほどお見せした本学構内の発掘地点で具体的に何をしていたのかを知るには、そう多くの文字資料があるわけではありません。

では、新しい時代を対象とする考古学がどのように展開したのでしょうか。簡単に辿ってゆきたいと思います。

まず、大正11年（1922年）に濱田耕作『通論考古学』が出版され、歴史と考古学の対象範囲について大きなインパクトを与えました。濱田はこの中で、「学問分化の結果、自ら考古学の研究範囲の限定せらるるものあり」、「文献的資料豊富にして、是のみを以ても略ぼ其の時代を研究するに充分なる時代は、主として歴史家の手に研究を委するを常とす」、「我国に於いては、推

古朝より奈良時代に至りて、始めて文書記録の存するものありと雖も、未だ豊富なりと云う可からず」⁵。要するに、考古学の年代的な研究範囲は限定され、文献が十分にある時代に考古学は必要ない。推古朝の飛鳥時代から奈良時代にかけて、文字記録はもちろんあるが多くはないので、そのあたりまでが考古学の範疇だ、と言っています。この発言が与えた影響により、中世や近世が考古学の研究対象から外されることとなります。その伝統は、長く続きました。

ただし戦後には、違った研究文脈の中で近世の遺跡に対する調査が行われます。例をあげると、1958-60年に増上寺の徳川墓地の調査が行われます。徳川家の菩提寺は増上寺と寛永寺であり、将軍と身内たちは寺域内に廟を含んだ墓を作りました。徳川秀忠の霊廟は非常に瀟洒なものであり、戦前には国宝指定されていました。ところが1945年の空襲で霊廟がすべて消失してしまいます。そこで戦後、裸の状態になっていた墓を整理しました。現在、増上寺の中にある徳川墓地の墓域内は、整理した後の墓です。この整理の一環として、東京大学の人類学者である鈴木尚先生が墓の構造や副葬品などを調査⁶しました。ですから、その発掘調査は形質学的関心の下で行われました。

これと同時期の1965-70年に、日本最初の磁器窯と考えられていた有田の天狗谷という窯で発掘調査⁷が行われています。これは、近世の窯業遺跡に対する初めての発掘調査です。それが発掘された理由は、日本の磁器が江戸時代にヨーロッパを市場化した、美術的・歴史的価値の高いものとして評価されていたからでした。そして同じ理由により、この磁器窯発掘は、考古学というよりはむしろ美術、陶磁史に対する興味をもって進められました。

「近世考古学」が加藤晋平、中川成夫によって提唱されたのは、1969年の日本考古学協会第三十五回総会の研究発表においてです。彼らは「考古学の

5 濱田 [1922 : 14-15]。なお、本講演録の引用文はすべて、原文の旧字・旧かなを新字・新かなに改めている。

6 鈴木尚他編 [1967]。

7 三上 [1972]。

定義は広義・狭義の差はあっても物質的資料を媒介として研究するとされており、その対象とする時間の限定はされていない。従って歴史的時代区分の一つである「近世」も当然含まれる⁸と主張しました。時間の限定はしないというのは、考古学の主たる学問的な材料は「物質的資料」であって年代は問わず、新しい時代の近世も含まれるだろうということです。

実は2019年2月に、「近世考古学」提唱五十周年記念イベントを実施しました。もう五十年が経過してしまったことを感慨深く思います。「近世考古学」が提唱された1969年当時、1868年が明治元年なので江戸時代は約百年前のことになります。今から百年前の明治時代や大正時代について発掘調査すべき、と現代で主張できるのか。現状は、先ほどお話しした通りです。

江戸の町は、第二次世界大戦後の高度成長に伴う開発によりほぼ壊滅したと思われていました。ですが1975年に都立一橋高校の発掘調査を行った⁹ところ、非常に良好な状態で、六枚の生活面と明暦の大火（1657年）の火災層、墓地、土蔵、穴蔵、井戸、下水、流し場、建築基礎、杭列、芥溜などの生活跡が重層的に確認されました。これは、江戸遺跡発掘調査の嚆矢として非常に大きな意義を持ちました。現在でも江戸時代の遺跡が良好に残っているということが確認されたわけです。

その後、開発に伴う発掘調査の増加によって、特に1980年代以降のバブル景気の時代の中で発掘調査が進行していきます。江戸遺跡についても発掘調査が各区で開始されます。この潮流の中で本学構内の発掘調査も行われました。

学内調査の成果と近世考古学等に対する評価

東京大学構内の調査成果はどのように学外から評価されるのでしょうか。東大の発掘調査に携わってきた僕が正当に評価できるか自信ありませんが、外部評価を数点ピックアップして紹介します。

8 中川・加藤 [1969: 27].

9 都立一橋高校内遺跡調査団 [1985].

近世考古学という分野では、古泉弘先生が次のように評価しています。「近世考古学はようやく研究活動への地歩を固めたといえる。1984年に始まる東大構内遺跡の発掘調査がその踏み台ともなった。加賀藩とその支藩という同一の関連大名藩邸内の調査がいっせいに行われ、情報量が飛躍的に増大したためである。」¹⁰つまり、東大構内の調査が近世考古学研究の基盤を築いたという評価です。また古泉先生は、「一九八三年から本格的な発掘調査が開始された。…（中略）…五つの地点での発掘調査の進捗によって、すばらしい成果が次々ともたらされた」¹¹とも仰っておられます。

歴史学分野においても、例えば東大百周年記念事業でも活躍された宮崎勝美（元本学史料編纂所教授）先生は、「調査を担当している東京大学埋蔵文化財調査室のスタッフによって遺構・遺物研究も精神的に進められており、江戸遺跡の調査・研究を進めていくうえでの基準となる成果が蓄積されてきている」¹²。また岩淵令治（学習院女子大学教授）先生も、「近年の武家屋敷研究は主に（引用者注：考古学的）調査の過程で成立した分野であり、「藩邸研究会」も東大構内等の調査が大きな動因となっている」¹³と評しておられます。

これに加えて、陶磁史の分野からは古九谷についての評価¹⁴、また自然科学的分析についての評価¹⁵が学外で聞こえていました。

新しい遺跡をどう評価するか

先ほどお話したように、新しい近世資料は考古学的価値を認知されない時代が続きました。では、新しい遺跡はどう評価されるべきなのか。このことを考えるために、考古資料の性格を考えてみたいと思います。

10 古泉弘「近世考古学研究略史」（江戸遺跡研究会編 [2001：28-31]）。

11 古泉 [1990：73]。

12 宮崎 [2008：7]。

13 岩淵 [2004：643]。

14 「消費地遺跡の中で最も興味深いのは、東大構内の大聖寺藩江戸上屋敷跡から有田の初期染付や色絵とともに九谷の色絵と判定された皿の破片が出土していることである。」（林屋 [2002：196]）

15 「消費地の調査として大きな収穫が得られたのは東京大学構内の建設工事に伴って出現した遺構、遺物であった。調査は、理学部七号館、法学部四号館など、医学部附属病院地点、山上会館、御殿下記念館地点などに広がったが、特に病院地点の調査は著しい成果をもたらした。」（山崎 [1993：79]）

まず確かなことは、考古資料のみならず、資料はすべて「痕跡」であるということです。有形資料には物である考古資料、文献である文字史料、民具のような民俗資料、現存建造物のような建築資料などがあります。これらは素材によって性格の違いはありますが、これらはすべて昔の人間の活動の痕跡であります。物としての痕跡で地下に埋没していたものが考古資料であり、字というコードで残されたものが文献資料であり、今まで地下に埋まらずに伝わってきたものが民俗資料であると区別されているに過ぎません。これらの材料には長所短所がありますので、歴史の見方に応じた資料を使用する必要があります。私も考古学者は、人の活動のプロセスが歴史と認知していますので、すべての活動が重要な研究対象であり、同時にその活動の痕跡が研究材料であると言えます。

さらに、地域史や民俗学の調査をすると、在地に残る伝承などは近世、特に近世の後半に形成されたものが多く、一つの言い伝えや慣習が在地の地域史を考える上で重要な材料になることがあります。こうした無形資料と先に述べた有形資料とを合わせて人間の活動を復元していくというのが、歴史考古学の立場です。

これまで歴史の教材に出てきたものは、事件や政治史が中心でした。航空機を例にしますと、ライト兄弟が1903年に初めて有人飛行に成功したことは歴史的な事件として評価されています。ではその後、僕らが飛行機を移動のツールとして使えるようになったのはいつ頃なのでしょう。戦前の日本はそういった状況にはなかった。戦後、昭和20-30年代ぐらいまでも同じだったはず。僕が学生の頃に、大人料金の半額で乗れる割引料金がありました。「スカイメイト」という名称だったのでしょうか。50%オフでも非常に高額でした。つまり、僕らの生活や物流において大きな変化がもたらされたのは、1903年からすでに六、七十年も経った後だったということです。そこからさらに現在では、中国から野菜が大量に輸入されるような物流の変革が起り、同時に農薬の問題などが新しい歴史的事件として認知されています。つまり、一番最初に起こったことだけが歴史事件のすべてなのではなく、

それが普及したことこそが次の事件の大きな引き金になっています。われわれの活動という点では、ライト兄弟の成功よりも、航空機が生活や移動の手段として整備されていった昭和30年以降の方がむしろ大きなエポックになっていると言えるでしょう。

ここでブローデル¹⁶というフランスの学者が唱えた、三つの時間概念を紹介します。僕が歴史を考える上で大事な捉え方だと思っている説です。

第一の時間は、一年、一日単位の時間、伝統的な歴史学が対象としてきた政治史、事件史、日常の個人の生活、あらゆる生活形態の短い時間です。例えば、天正10年6月2日に本能寺で何があったか。これは伝統的な歴史学が対象とした政治史、事件史だと言って良いかもしれません。

第二は、十年、二十年、四半世紀、半世紀という周期期間、価格曲線、人口動態、賃金動向、利率変化、生産調査、厳密な流通分析などの変更局面です。現在、人口が徐々に減少していることが問題になってきていますが、そういった少し長いスパンの時間の流れが歴史にとって大きな影響があるといえます。

第三は、百年単位で動くゆったりとした歴史、長期持続の歴史、構造、風土、植物分布、動物群、耕作などの地理学的枠組、システムすなわち思考と行動の古くの慣習、ときにはいかなる論理にも抵抗しながらしぶとく生き続ける枠組です。

この三つが組み合わさって歴史が動いていると彼は提唱しているわけです。この中で言うと、考古学には第二、第三の時間概念に対して大変なメリットがあります。

例えば日本人は、遅くとも中世末ぐらいから椀、皿、箸を使ってご飯を食べるという習慣を持ち続けています。明治維新後に洋食という非常に大きな西洋のインパクトがあったにもかかわらず、そのインパクトを取り込んで和様化していきながら、維新以前からの習慣、食文化が維持されている。これ

16 Fernand Paul Braudel (1902-85). 三つの時間概念について、「長期持続—歴史と社会科学—」(井上編 [1989 : 15-68] 収録, 原著 1958年) 参照.



図 11 「お椀」 写真提供：堀内秀樹



図 12 「井」 写真提供：堀内秀樹



図 13 「加賀藩邸出土散り蓮華」 写真提供：東京大学埋蔵文化財調査室

を日本の基底文化と言い換えても良いかもしれません。先に述べた第三の時間に該当するものでしょう。

この三枚の写真(図11-13)を見てください。これはどうやって使うのでしょうか。左の写真に写っているお椀は、みそ汁とかお吸物とかを食べる道具です。旅館に行くと、ご飯が入っていたり煮物が入っていたりするかもしれません。では、中央と右の写真に写った井とレンゲはというと、ラーメンや中華丼を食べる道具として使います。ちなみに、写真のレンゲは、本学本郷キャンパス内の発掘調査で出土したものです。

私達が自分の家でラーメンを作った時、誰にも強制されることなく自由に食器を選んで良いにもかかわらず、何故この井とレンゲを選んでしまうのか。皆さんは自分ではまったく制約がなく自由に暮らしていると思っても、実はこういう文化的制約の中で21世紀という時間の日本という場所に過ごしているのです。考古学とは、このように気が付かないこと、文字に書かれにくいことも物という痕跡から対象にして歴史を考えられる分野だと思って

います。

これは、工学部一号館の発掘調査で出土した「貧乏徳利」といわれる、美濃の高田で作った徳利の写真（図14）です。一升の徳利と、その半分の五合と、さらにその半分の二合半の徳利です。規格性の高いもので、買ったお酒を入れる容器として酒屋が持っていました。つまり、「酒を一升くれ」というと、これに入れて丁稚が運んでくれるわけです。所属を示す間屋あるいは



図14 「加賀藩邸出土貧乏徳利」
写真提供：東京大学埋蔵文化財調査室



図15 「高崎屋の文字が刻まれている徳利」
写真提供：東京大学埋蔵文化財調査室



図16 「高崎屋絵図」文京区指定文化財
写真提供：文京ふるさと歴史館

店の名前が徳利に記されますが、この徳利（図15）には「高さき」と書かれてあります。現在でも東大農学部の前門前のT字路の角に高崎屋という酒屋があります。この絵（図16）は、江戸時代の高崎屋の様子を描いたものですが、この屋号も、丸に高のマークも、今と全く同じです。高崎屋は江戸時代からずっと酒問屋として機能していました。

さらに、引き札に高崎屋の仕入れと書かれている絵（図17）が残っています



図17 「高崎屋引札」
写真提供：文京ふるさと歴史館

す。こちらの絵（図18）をよく見ると、大八車を引いて「江戸一」という銘柄の酒樽らしきものを運んでいます。本郷キャンパスの発掘調査によって、「江戸一」と書かれたお猪口も出土しています。つまり、当



図18 図16一部拡大

時の加賀藩はこういった店から酒を

調達し、周囲との関係を作っていたことがわかります。当時の江戸は、江戸城、武家地、町人地、寺社地というように住み分けられ、ブロック構造をなしていたことが知られています。吉田伸之（本学名誉教授）先生は、その構造に加えて、例えば、加賀藩をコアとしつつ周辺地域を含めた分節的な構造もあった、と指摘されました。

おわりに—大学資産として—

以上で本郷キャンパス発掘調査の三十五年間についてさわりをお話してきました。

最後に、東京大学は何を大学資産として扱ってきたのかを見ておきましょう。1988年に『東京大学本郷キャンパスの百年』という本が出版されました。この中では数ページ、大学前史として発掘調査の情報が掲載されました。そして、その四十年後の2018年には『東京大学本郷キャンパス—140年の歴史をたどる』が出版されました。この本を読んでもいただければと思います。その「おわりに」で、次のように書かれています。「…赤門や育徳園（三四郎池）などの近世の遺産と近代以降の施設群との調和をどのようにはかっているのか…（中略）…地下遺構はどのように調査され何が明らかになっているのか、などの観点から本郷キャンパスを幅広く捉え直してみようとしている」（同179-180）。この研究会のタイトル「古くて新しい学術資産」のように、時代的には古い情報であっても、新しく資産として評価されつつあるこれらの学術遺産、歴史資産が今後どう継承されてゆくか、注意し

てゆくべきでしょう。

もしくは物だけ、あるいは過去のプロセスだけではなく、現在の環境そのものを大学の資産として位置付けて良いのではないのでしょうか。例えば、現代でも先ほど話した高崎屋が残っており、農学部の学生さんや教員たちが高崎屋で買うこともあると思います。一方で近年、学内のファカルティハウスやダイワコビキタス学術研究館等では店がオープンし、周辺の人たちを呼び込んで食事や活動の交流をしています。このような交流は現在いきなり始まったわけではなく、長い時間をかけて、高崎屋の例でみれば江戸時代を含めて醸成されてきたのかもしれませんが。

ちょうど時間になりましたので、僕の話はこれでおしまいにします。ありがとうございました。

○鈴木 ありがとうございました。実は私が駒場から本郷に進学してきたのは1984年です。日本史学研究室の前の文学部三号館予定地の発掘がその時ちょうど始まっていたことが思い出されました。ですので私にとっては、東大では発掘をしているのをごく自然のことだと思っていたのですが、その1984年に堀内先生たちによってその発掘が開始され、継続されてきたことを本日の講演で改めて認識し、その時間の長さに思いを致しているところです。

余談はさておき、松田先生からコメントをいただきたいと思います。

3, コメント (松田陽)

○松田 皆さんこんにちは、松田陽と申します。私は、文学部にある文化資源学研究室に所属し、研究室が提供する文化資源学コースと文化経営学コースの二つをつなごうと試みております。研究室が用いている定義に則せば、文化資源学は世の中で眠った状態にある文化資料体を研究調査し、それによって新たな価値を与えて活用できる状態にする学問であり、文化経営学はその文化資料体を社会の中で実際に経営する、すなわち保存、活用、継承す

るための知見を構築する学問です。

この文化資源学と文化経営学の観点から見ても、堀内先生が率いる東京大学埋蔵文化財調査室の活動は意義深いものだと改めて感じました。埋蔵文化財調査室の三十五年間にも渡る活動は、眠っている状態の文化資料体に価値を与えることを文字通り体現するものです。文化資源学の立場とまさに相通じます。

さらに堀内先生のお話から、日本における近世考古学の一大拠点としてこの学問領域を新たにつくってきた中心地が、東大の埋蔵文化財調査室だったことを再認識させられました。

ここからは堀内先生の講演に対する感想を散りばめつつ、私の用意したスライドに沿ってお話を進めます。

グローバル大学であるためのローカル性

このスライドは、2014年に当時東大総長だった濱田純一先生が書かれた本『東京大学—世界の知の拠点へ—』の表紙です。ここで注目していただきたいのは、「世界」という言葉です。皆さんも何度も聞いてきたと思いますが、東京大学は世界の中で活躍する大学になろうとしています。この本はその理念が端的に表れた一冊だと思いました。次のスライドは、大学のグローバルキャンパス推進本部という部局のウェブページ¹⁷です。説明するまでもなく、東京大学はグローバル化したキャンパスをつくろうとして、今、躍起になっているわけです。

研究や教育のグローバル化が東大教職員の努力目標であるのは確かでしょう。しかし、「グローバルな東大」や「世界の東大」という言葉はよく聞く一方で、「地域の東大」という言葉をほとんど聞かないという印象を私は長らく抱いてきました。「地域の中の東京大学」、あるいは「地域に根ざした東京大学」という語句を、私はおそらく一度も聞いたことがありません。

しかしながら、東京大学がグローバルな大学を本当に目指すのであれば、

¹⁷ https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/intl-activities/intl-orgs/d03_05_01.html(2019年5月22日最終閲覧)

自らが立脚する地域の特質を上手に利用しない手はないと思います。グローバルに活躍しようとする大学が世界中に数多ある中で、東大が頭ひとつ抜け出すためには、東大の地域性を戦略的に、あるいは文化経営学的に利用し、東大の個性として打ち立てるべきだと私は考えます。

では、東京大学の地域性、ローカル性とは何でしょうか。やはり場所の歴史、つまり本郷キャンパスならば本郷の歴史が、一つの強い柱になるように思います。堀内先生が本日話されたことも、今日本郷と呼ばれる地域の中で東京大学を考え直す、あるいは東京大学創立以前の人々の活動を考え直すということだと思います。埋蔵文化財の調査は、地域性、ローカル性が持つ価値を引き出すものです。

文化経営学の観点から言えば、我々が今いるこの本郷という場所の歴史性を十分に活かした「グローバルな東京大学」づくりを是非ともやって欲しいですし、それが実現するように私も働きかけたいと思っております。少し前に、東大の卓越研究員として、大学の理事、総長を交えた方々に短いプレゼンテーションをする機会がありましたので、「この場所の歴史性を活かした大学づくりに人文系の学問はとりわけ貢献できる」という話を思い切ってしてみたところ、ご賛同のお声をいただきました。そこで私は、東大百五十周年記念として何か形にできないかと思い、現在いろいろと計画しているところです。

「この場所」の歴史のプレゼンテーション

この計画を実現するためには、文化経営学的視点から、「この場所」の歴史をどのようにプレゼンテーションできるのかを考えなければなりません。物理的空間—今の我々にとっては本郷—を歩いている人々に、その地域の歴史をどのようにして伝えるかを考える必要があります。

この視線で本郷キャンパスの現状を見てみると、実は、それぞれの場所の歴史を伝えるさまざまな仕掛けがすでに存在していることがわかります。これは、龍岡門から少し入って右にローソンがある前の場所の写真(図19)で

す。説明パネルが設置されており、加賀藩邸内の東長屋に付属して井戸があったことを示しています。パネルの後ろにあるのは、井戸の上に付けられている蓋です。パネルは2000年に東京大学総合研究博物館で開催された「加賀殿再訪」展に関連して設置されたものですが、2019年1月24日に新調され、現在は新しいパネルが置かれています。

これはほんの一例ですが、東京大学の敷地内には、それぞれの場所の歴史を部分的に示す仕掛けがすでにいくつか埋め込まれているわけです。しかし、我々が考えねばならないのは、こうしたプレゼンテーションがどれほど有効なのかであります。こうしたパネルを通した説明は、考古学や歴史学の専門知識に関心がない一般の人たちにどれだけ伝わっているのでしょうか。井戸の説明



図 19 「ローソン前の解説板」
写真提供：松田陽



図 20 「病院前分離帯の解説板」
写真提供：松田陽



図 21 「山上会館での遺物展示」
写真提供：松田陽



図 22 「赤門脇 ucode 写真」
写真提供：松田陽

パネルに関して言いますと、古いパネルを見る人はほとんどいなかったように感じております。新しいものになって、この点はずいぶん良くなりました。

医学部附属病院の前の道路には分離帯があります。そこにもこの写真(図20)のように説明パネルがあり、出土した石組について埋蔵文化財調査室の調査結果を踏まえた説明が書かれています。写真では見えませんが、パネルが設置されているコンクリート壁の裏側には石組が移築されています。当時の病院長がこういった歴史に関心と理解のある方だったため発掘調査の成果を残すことになり、説明パネルも設置できたとお聞きしました。このことから、それぞれの場所の歴史を語る仕掛けを設置するためには、それなりの手はずを踏まねばならないことがわかります。誰かが提案し、関係者の許可を取り、資金を工面してはじめて、設置が可能になるわけです。

山上会館の中には、東大の敷地内で出土した遺物が一部展示されています。この写真(図21)のように、磁器を中心とした出土物を通して東京大学の敷地内の歴史を語る仕掛けが埋め込まれているわけですね。これも、誰かが企画を通し、委員会などで承認を得、資金を確保したことで実現されているわけです。この展示の場合は、東大百三十周年記念のときに小佐野重利(本学人文社会系研究科教授)先生が尽力されたと伺っております。

さらに本郷キャンパスの数箇所では、このような仕掛けで歴史が語られています。2008年に先進的な試みとして設置されたucodeというもので、QRコードのようなものが使われており、端末をかざせば設置場所の歴史情報が読み取れるというものです。当時は非常に先進的な手法だったと思いますが、その後のメンテナンスやアップデートがうまくなされてこなかったようで、現在スマホをかざすと謎の数列が出てくるだけで、何の情報も読み取れなくなっています。このコードが何なのかということについての説明自体、今ではどこにも提供されていません。

ucodeは赤門脇にも設置されていますが、この写真(図22)のように、その隣には別の説明パネルもあります。二つも仕掛けは要らないのではないかと思います。つまり、二つの主体が赤門という場所の歴史をプレゼン

テーションしようと意図したけれども、両者間の調整が行われなかったわけです。こういった問題を解決する仕掛けが今後考えられるべきでしょう。

先ほど堀内先生がおっしゃっていたように、総合図書館前から旧図書館の基礎が出土した時、埋蔵文化財調査室の方々は意図的に発掘状況が見えるような形にくださったので、一般の人々の関心を大いにひきつけました。これも場所の歴史のプレゼンテーションの一つだと思います。さらに、そこでは解説パネルを通して出土物を丁寧に説明していました。パネルの数が徐々に増えていく様は、リアルタイムで変化していく発掘の最新情報を習得させる仕掛けとして秀逸でした。ただし、当たり前のことですが、発掘調査が一時的なものであるのと同様、展示も一時的なものでした。一時的なプレゼンテーション手法を効果的に組み合わせつつ、より恒常的なプレゼンテーション手法を使っても場所の歴史を語っていく仕掛けを考えてゆくべきでしょう。

「この場所」の歴史の研究調査

「この場所」の歴史のプレゼンテーション手法の開発に加え、「この場所」の歴史そのものについての研究も深化させていかねばなりません。言うまでもなく、埋蔵文化財調査室の方々は考古学的な観点から研究調査を長期的に遂行してくださっていますが、考古学以外の観点から研究できるようなモノ資料も大学構内にはたくさん残っています。埋蔵文化財調査室の方々と協働で調査できるような文化資料体もあります。面白い事例はいくつかあるのですが、時間がないので一点だけご紹介します。

正門を入れて左手に進んでゆくと、工学部一号館があって、その前に広場があります。その広場に、蛇塚という石造物があります。お化け燈籠と呼ばれることもあります。この蛇塚は地中に埋蔵されているわけではなく、江戸時代の文献にも特に記録されていないようですが、加賀藩のゆかりの物だという伝承が残っています。ただおそらく本当に江戸時代から存在していたのでしょう。工学部一号館前広場は工学部の管轄ですが、工学部は歴史的にこの蛇塚を大事にし続けてきました。

蛇塚は興味深い、謎の石造物です。大日報身真言である梵字「𑖀𑖳𑖤𑖱𑖪𑖻𑖟𑖰 (アビラウンケン)」の、なぜか「𑖟 (ケン)」がなくて「𑖀𑖳𑖤𑖱𑖪𑖻」だけが刻まれている。つまり仏教の、大日如来信仰関係のものです。この梵字については、あとで一色さんにお伺いしたいと思います。

これは1910–12年頃に撮られた、当時の医学部の須藤憲三先生の写真(図 23)です。ここにも蛇塚は写っています。関東大震災の前ですから、左奥に見えるのは工科大学の本館で、写真の場所はその前の広場です。したがって蛇塚は、少なくとも百年以上同じ場所にあるわけです。

一部の間では有名な話ですが、エドワード・モースが蛇塚のスケッチを残しています¹⁸。スケッチでは蛇塚が井戸の前にあり、柵が回されています。

モースの日記を丹念に読んでいくと、蛇塚についての記述を見つけることができます。モースは明治10年（1877年）以降、三回日本に来るのですが、一回目の滞在の時に、「現在の加賀屋敷は荒れ果てていて、あちらこちらに古井戸があるが、ふたをしていない井戸もあるのでぶる危ない」という旨の記録を残しています¹⁹。そして「屋敷の中で、私の家から一ロッド〔三間たらず〕もへだたっていない所に、井戸と石の碑とがある。後者は竹の垣根にかこまれ、廢頽して了っている」²⁰と記しています。蛇塚は「碑」ではないため、「石の碑」が蛇塚だと言うと違和感を持つかもしれません。ですが、原文²¹では、“a stone monument”が訳文の「石の碑」に対応しています。モースが本来意図していたのは碑ではなくモニュメントなのですから、この日記に書かれ

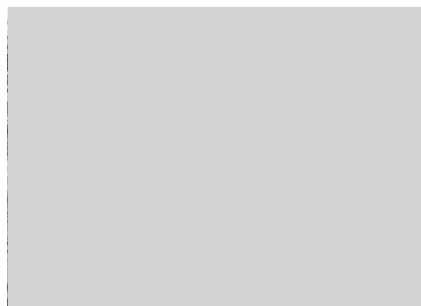


図 23 「蛇塚」
撮影：須藤憲三、写真提供：Gakken

18 “Fig. 293. —Well at Kaga Yashiki, Tokio” (Morse [1886 : 301]).

19 モース [1929 : 上, 18].

20 モース [1929 : 上, 452].

21 Morse [1917 : vol. I, 375].



図 24 「工科大学」(小川 [1900] 東京
大学文書館蔵本より)
写真提供：東京大学文書館



図 25 図 24 一部拡大



図 26 「元前田家の邸 そのむかし御殿
女中お手打ちのたたりが…いま
も残る蛇塚」『毎日グラフ』1977
年 4 月 17 日号 p.8.
写真提供：毎日新聞社



図 27 「倒れた蛇塚」写真提供：堀内秀樹

ているのは蛇塚だと考えて間違いないでしょう。

ではモースの家はどこにあったのでしょうか。モースの日記にある「私の家から一ロッド」というのは、五メートルぐらいです。ですから、モースはこのstone monument、石造物のすぐ近くに住んでいたとわかります。

モースの家はさらに正確にはどこにあったのでしょうか。モースの家は工学部一号館の隣、今日の工学部六号館のところにありました。モースは自分の家のスケッチも残しており、米国セイラムにある博物館²²には、この家の写真も残っています。この家の玄関のすぐ近くに、先ほどの蛇塚がありました。

この写真(図24)は、小川一真の写真集²³の中の一枚です。左奥に工科大学本館が写っていて、中央右より奥に井戸と蛇塚が見えます(図25)。ここは、現在の工学部六号館前に当たる場所、つまりはモースが住んでいた家の前であり、蛇塚の原位置でした。この写真が撮られた後に、蛇塚が今の場所に移され、今日まで受け継がれてきたことがわかります。

この写真(図26)は、「毎日グラフ」(1977年)の中のものです。東大百年記念ということで写真が載っていますが、蛇塚の写真もあります。お供え物が置かれていて、蛇塚が大事にされていることが確認できます。

正門を出た右手に喫茶店「こゝろ」がありますが、昭和9年(1934年)生まれのご主人は、以前はたまに「お蛇さん」(蛇塚のこと)にお線香をあげていた、と仰っていました。蛇塚は、ある意味で本郷という地域の中で大事にされてきた石造物だったのでしょう。

これは、東日本大震災で蛇塚が倒れたときの写真(図27)で、堀内先生が撮られたものです。ここまで倒れた後も蛇塚は撤去されず、同じ場所でちゃんと復旧されました。そうして元の姿に戻った後、今度は2017年秋に、てっぺんの宝珠のような部分が傾いてしまいました。しかし、それもいつの間にか直されていました。蛇塚がゆるやかにずっと大事にされてきたことが感じられます。

22 Peabody Essex Museum, East India Square, 161 Essex Street, Salem, MA, USA.

23 小川 [1900].

埋蔵文化財調査と連携した文化資料体の新たな価値づけ

最後に、埋蔵文化財の調査と蛇塚との関連性についてお話させて下さい。

そもそも、なぜ蛇塚は本郷キャンパス内にあるのでしょうか。モースが最初に日本に来た明治10年（1877年）にはだいたい今の位置に存在していたことは確かですので、まず間違いなく加賀藩邸時代にも存在していたでしょう。不義をはたらいた藩邸の女中をいたぶるべく蛇責めにした場所の跡だという伝承も残っていますが、さすがにこれを歴史的事実としてそのまま受け取るわけにはいきません。

埋蔵文化財調査室の方々には、本郷キャンパスの今日の地図と、明治17年（1884年）に参謀本部陸軍部測量局が作成した地図を突き合わせ、さらに江戸時代末期（1840年代）に作られた地図とも対応させながら、本郷という場所の歴史を検討されています。これらの地図に調整を入れながら比較検討すると、現在の本郷キャンパスが占める場所において、幕末から明治時代かけてどこにどういった建物があつたかについて、かなり正確に突きとめられるようになっていきます。

現在の工学部一号館と六号館の間の辺りには天保元年（1830年）以降、「御鎮守」という神社がありましたが、埋蔵文化財調査室の成瀬晃司さんに教えて頂いたところでは、さらに前の時代にはここには地蔵堂が置かれていたそうです。加賀藩邸時代、この地蔵堂／御鎮守の脇には井戸がありましたが、その井戸は明治初期になっても残り、その井戸の前にあつた蛇塚をモースは見たわけです。

蛇塚がいつからその場所にあつたのかはわかりません。ですが、宗教関係のものだったという理由からでしょうか、明治時代になって東京大学のキャンパス内に組み込まれた後も、なんとなく大事にされました—この「なんとなく」という感覚がとても重要なのではないかと私は考えます。そして戦後になつても、お線香があげられたりして、蛇塚はなんとなく大事にされました。「動かすとたたりがある」というような伝説も生まれましたが、これも

蛇塚をなんとなく大切にする気持ちが背後にあると見るべきでしょう。そして今日でも、工学部の施設課は蛇塚をなんとなく尊重しながら管理しているのです。普段はあまり目立たない蛇塚ですが、このような文化資源はまだたくさん眠っていますので、埋蔵文化財調査室の方々と一緒に研究調査し、新たに価値付けしていくことで、東京大学が所在する場所の歴史のプレゼンテーションにつなげることができたなら、面白いのではないかと考えています。

これからも私は、「この場所」の歴史のプレゼンテーションを通して、「この場所」の歴史の研究調査を通して、地域の歴史性を生かした東京大学づくりに貢献していきたいです。本日、堀内先生のお話を聞いて、その念を一層強くしました。私の話は以上です。

4、全体討論

コメントへの応答

○鈴木 ではまず堀内先生に、松田先生のコメントに対して応答していただきましょう。

○堀内 松田先生によって、発掘したものを活用した大学作りという重要な視点が示されたように思います。埋蔵文化財調査室はすでに三十五年という長い間活動していながら、現在に至るもさほど学内で周知されていないと感じてきました。

なぜ周知されてこなかったかという点、それは埋蔵文化財調査室が研究や教育ではなく法律に対応して設けられた組織だったことに起因しているでしょう。つまり、文化財保護法の中で大学として埋蔵文化財をどう保存してゆくのかが問われ、ともかくも四つの地点を発掘しようということでスタートしたわけです。ところが東大には一むしろ日本の大学では東大だけですが

一三十五年も掘るべきものがあつたために、埋蔵文化財調査室がこんなにも長期に渡って存続しました。ですので、発掘したものをどう活用するかという以前に、研究成果すら大学内で発信できないような状況が、少なくとも20世紀中は続いていました。21世紀に入ってから、埋蔵文化財調査室が研究に踏み込み、主体的にプロジェクトを大学で発信できるようになりました。埋蔵文化財調査室に割り当てられた研究予算で行っている「調査研究プロジェクト」は、今年でようやく四回目です。ですので、松田先生がおっしゃった、発掘したものを活用した大学作りという視点は、かつての我々には想像すらできないようなものでした。

このような状況が様変わりした要因の一つは、アカデミックコモンズの発掘調査だったように思います。その意味では、発掘状況を見えるようにして良かったと感じています。

アカデミックコモンズの発掘調査担当者は、私でした。そして実は、発掘調査がスタートした1984年の段階で、文学部三号館と法学部四号館が建っている場所を調査したのも私でした。この二つの調査の間は、三十年を隔てています。その三十年間に蓄積した情報は、膨大かつ良好なものです。それは私たちにはわかっていたことですが、以前は発信するすべがなかった。これからは松田先生や鈴木先生のような方々と協力して、大学としての環境づくりや資産づくりをしていきたいと感じています。それが、偽らざる思いです。

○鈴木 私は学生時代に日本史学研究室の窓から、文学部三号館用地が発掘されているのを見てきました。学生の一部にはバイトとして参加させていただいた者もいます。その後も吉田伸之先生が江戸の加賀藩邸の研究をしておられました。ですので私はこれまで、埋蔵文化財調査室による発掘調査と日本史学での研究が並行して進み、調査室の成果が十分に評価されているように思っていました。それが今回のお話で、実は埋蔵文化財調査室がそれほど

恵まれた環境に置かれていなかったということを知り、驚いているところです。同じキャンパスで働いていながら、このように見えていないところがあるということは、衝撃的であると同時に印象的でした。

蛇塚を掘り下げる

○鈴木 さて先程、松田先生から蛇塚の梵字について一色さんに話が振られていました。この点についてフロアに居る一色さんに伺ってみましょう。

○一色 残念ながら、この蛇塚の梵字について付け加えられることは存じておりません。ただ、中世の頃には五輪塔などを今の墓石のように立てていたと聞きます。むしろお伺いしたいのですが、蛇塚がもともとは中世の墓のようなものの遺物であった可能性というのは全くないのでしょうか。

○松田 蛇塚は本当に謎の石造物だと思います。元興寺文化財研究所の専門家に一度見てもらったのですが、このようなものは見たことがないと言われました。部材ごとに石質が違うようですので、異なる部材を寄せ集めて作ったものかもしれません。また特に分からないのは、アビラウンケンのケンがなぜないのか、ということです。その部分が傷んでいたので取り除いて整形したのでしょうか。あの場所に墓のようなものがあつたかどうかにつきましては、堀内先生にお答えいただければ嬉しいです。

○堀内 本郷キャンパスで、藩邸として使う以前の痕跡はほとんどありません。また、中世のものが出土することもほとんどありません。なので、あの場所が中世に墓域として機能していたということはありません。石塔の型式も類例の見当たらないようなものですから、どのようなプロセスで近世に蛇塚が設置されたかについても推測し難いものがあります。五輪塔や宝篋印塔の流れの中で解釈できないとすれば、梵字が入っている以上、庭の燈籠と

も思えませんから、松田先生がおっしゃったような宗教関係のものか、というぐらいのことしか言えないですね。

○松田 もう一点付け加えますと、東京大学では施設部、また施設部の前身にあたる部局が構内地図を明治時代から作り続けているのですが、興味深いことにこの地図の中では蛇塚は一度も記されていません。大学としてはその価値を一切認めていないのかと思いきや、蛇塚は一度場所を移してまで今日まで残り続けてきました。民俗学の領域で取り扱うべきような伝説もあります。その伝説に何かを感じた人々が蛇塚をなんとなく大切にきてきて、それが今日の工学部施設課の人々に引き継がれてきている。発掘調査さえ一度もなされていないそうです。この現象に興味を惹かれるとともに、蛇塚はこの先もなくならないのではないか、と思っています。

○鈴木 私も学生から教員になる前ごろに、蛇塚に触ると死ぬという伝説を聞いた覚えがありますね。

○堀内 私は、蛇塚のジョイント部分が凸と凹になるよう加工されているのかどうか、一度見たいと常々思っていました。東日本大震災が起こったとき、真っ先に飛んで行って撮ったのが先程の写真です。興奮して一枚しか撮っていませんでした。もうちょっとちゃんと写真を撮ればよかった。

○鈴木 誰が直したのですか。

○松田 工学部の施設課が直したようです。

○堀内 フロアのMさんから質問があるようです。

○M 蛇塚の時代背景について確認させてください。ご存じだと思われませんが、前田利常と徳川家からお興入れした珠姫は政略結婚でしたが非常に仲の良い夫婦でした。ところが春日の局の命により（?）、珠姫の乳母が幕府の情報が筒抜けになるのを恐れて産後の珠姫を隔離させて衰弱死に至らしめたことに利常が激怒し、その乳母を蛇責めの刑に処したといえます。本郷キャンパス内でもそのような処刑が行われたのか、あるいはその乳母の処刑と何らかの関係性があるのかもかもしれません。金沢の城下町や本郷キャンパス内の藩邸整備は前田家の三代から五代の間に完成されました。そうであれば、蛇責めの処刑が行われたという時代とも重なります。

さて質問ですが、ケンブリッジ大やハーバード大などと東大を比較すると、東大キャンパス内にはイギリスやアメリカにはない史跡が多くあります。これらの歴史的な文化資源は東大の潜在的価値として活用すべきだと思います。このような文化資源を活用する研究は、今後どのような方向に向かうのでしょうか。

○松田 私がお答えすべきでしょうか。

東大の文化資源に対しての私のアプローチは、今、目の前にあるものを丹念に調べて知見を積み上げてゆく、というもので、理論考察からスタートするものではありません。私はイギリス留学時代の指導教員から、研究においてはまず理論的な問いを立て、その問いを検証するために資料を選び、その資料を分析して上がってきたデータを基に理論を刷新していきなさい、という指導を受けました。しかし、その指導内容に抗うかたちで、東京大学の文化資源については、あえて理論考察から始めないアプローチを用いています。どういった文化資料体があるのかがまだ定まっていない原野のような領域に踏み込んでいるからです。まずはどのような資料があるのかの謙虚な把握から始めねばならず、その把握のための視点こそが、後に理論になっていくのだと信じています。

ですから、例えば蛇塚のことを緻密に調べていくだけでは、新しい理論を立てられないかもしれないし、また私自身、蛇塚の調査の成果についてまだ明確な見通しを持っているわけではありません。先ほどのモースの日記ではありませんが、なにぶんこれまで知られていなかった関連資料が突然出てきて、知見がガラリと変わることがあるからです。文化資料体がどこにあるのかが完全にわからない状態で、眼前に現れた文化資料体を調べているような状況です。眠っている資料体を相手にする調査の場合、これは避けようがありません。

ただし、すぐには理論構築につながらずとも、文化経営の立場から見ると、文化資料体の把握は、大学の個性づくりあるいは新たな価値を与えるという点で、やはり大きな意義をもつと思っています。どのような経営資源があるかがわからずに文化経営はできないでしょうから。東大の敷地にある埋蔵文化財や、木下直之（本学人文社会系研究科教授）先生がおっしゃっていた「地上にあるけど埋蔵されている文化財」を考える上では、まずは眠っているものを一つ一つ掘り起こすところから開始せねばならないでしょう。

東京大学が結ぶ地域と世界とのネットワークとは何か

○鈴木 では、フロアの皆さんからご質問、コメントをいただきたいと思います。

○石坂 日本史学研究室の石坂桜と申します。地域の中の東京大学について考えるとき、キャンパスという区切られた境界内部の発掘調査から、境界内に必ずしも収まらないような日常生活、人や物の出入り、意図して記録に残されない世界をどうやってのぞき込むか、というのは、面白くも難しい課題だと感じています。その意味で堀内先生から高崎屋や白糸のお話を興味深く伺いました。高崎屋の酒瓶以外の事例がございましたら、もう少しお話をくださいませんか。

○堀内 藩邸に出入りする商人というのは一定数いましたが、商品として発掘調査で残るものと残らないものがあります。高崎屋の場合は店が現存しつつ、昔の遺物を、それと関係した加賀藩をコアとする物の動きの証拠として挙げることができました。ですが、これは大変ラッキーな、稀有な例と言っても良いように思います。

高崎屋と同様の例があるかと言うと即答できませんが、今後そのような視点をもって探さる必要があるでしょう。ただし、例えば工学部十四号館の場所は加賀藩邸ではなく、大縄地と呼ばれる、中山道を警護する下級幕臣の居住地でした。その発掘調査をした時には、加賀藩の家紋の入った瓦が大量に出てきています。境界内外が火災で全焼した場合には、焼跡の残骸を藩邸内ですべて処理しているのではなく、それらを材料にして藩邸外の建物を作るための土地を平準化したことがあるかもしれません。

○松方 松方冬子（本学史料編纂所准教授）と申します。私は、日本史を勉強していきまして、加賀藩も若いころに研究しました。現在は、オランダ東インド会社の文書読んでいます。学問的な質問ではないかもしれませんが、松田先生が最初におっしゃっていたグローバルとローカルという二分法について質問させてください。その二つは相反するものなののでしょうか。

約二週間前にタイで外交史のワークショップをしたのですが、そのときアユタヤにあるオランダ東インド会社の商館跡に行きました。そこでは以前発掘調査がなされ、現在は小さな博物館ができています。その場所の発掘調査をした時にオランダ女王が来て、下賜したお金をもとに建設されたそうです。そこには、オランダに留学して博物館学を勉強した経験のある三十代のタイ人女性が勤務していましたが、彼女は博物館創設のときの中心人物でもあり、その仕事にも誇りを持っていました。展示スペースそのものは小さく、オリジナルな出土品は少しあるだけで大したものではありません。ですが、パネルに力が注がれていて、オランダとタイの関係を良いことも悪いことも書い

ています。彼女の説明によると、ここにある全ての画像はきちんと著作権に関わる手続きをして入手したものであって、ネットから取ってきたものではないそうです。彼女はそれを一番の誇りにしていました。一階はオランダ風のお菓子を作っている喫茶店が出店しており、コミュニティーセンターのように周囲の人が来て楽しめるようになっています。ミュゼオロジーの最先端のような感じです。

これを見て、そこにあるネットワークに衝撃を受けました。展示物は少ないかもしれませんが、地域住民とオランダの学術機関とをつなぐネットワークがここに確かにあって、若いタイ人が誇りを持ってそれを運営しているというインパクトです。彼女はアユタヤを訪れる外国人はオランダ人が一番多いと言い、隣にある日本人町跡の展示の仕方が（著作権などの点で）いかに駄目かというのを説明していました。これは一見すると過去を展示しているようで、実は現在を見せられているのではないのでしょうか。

こう考えたとき、東京大学が見せるべきネットワークは何なのでしょう。本郷通り沿いにある高崎屋はイギリスの大学と直接つながるのは、難しいでしょうが、東大教員が間に入れば、つながれるのでしょうか。東大教員でしか結節点になれないような、世界と地域のネットワークとは何なのでしょう。このネットワークが来校者にも見える展示とは、もちろん生易しいものでないことは理解していますが、どのようなものなのでしょう。

○松田 難しい質問です。ただし、過去においてある場所が外の場所とつながっていたことを示す物証から、グローバルなストーリーを作り出すことは可能でしょう。堀内先生が以前、本郷キャンパスから出土した薬の瓶についてお話されていましたが、これは中国でつくられた薬瓶が長崎経由で持ち込まれたものであって、それを突きとめるために精緻な調査を中国で実施されていました。ただ、高崎屋が東大を経由してどう世界とつながるのかというと…。

○松方 高崎屋にこだわらなくてもよいので、ぜひ理論的なお考えを聞かせてください。おそらくそれが先程の前田さんの質問と関わってくるのでしょう。また従来なかったネットワークをつくるというのは、一私も現在公募研究で関わっていますが—東京大学ヒューマニティーズセンターの課題でもあると思うんですね。松田先生とこういう議論をしたことがあるような気がしてきました。

○松田 車屋（根津の居酒屋）でしましたね。理論的に答えるのであれば、今後、東京大学が自らの地域の歴史性をグローバル大学としての個性として打ち立てることに成功すれば、その道筋は重要なモデルになると思います。世界にはグローバルなリーディング大学が何校かありますが、当然それぞれの大学にも地元があるわけです。大学がどこかの場所にある限り、どの大学もその地域と物理的、空間的に離れられることはできません。「大学と地域」と抽象化された次元で考えてみると、地域の歴史性を最大限に活かしたグローバル大学、というのは一つの目指すべきモデルでしょう。他の世界屈指の大学と比較したときに、東大はその地域性を見事に活かしているがゆえに優れているのだ、と言われるような状況を目指すべきだと思いますし、私自分もそれに貢献したいと考えています。

○松方 現在の東大は地元には根ざしてないということですか。

○松田 根ざしていないと思います。文科省が2015年ごろに八十六ある国立大学を国際・特色・地域に三区区分しましたが、東大は国際に分類されています。国も東大には世界を常に目指してほしいということなのかもしれませんが、このメッセージは、東大は世界「だけ」を見ていれば良いのだ、と理解されてしまう側面があると思います。また実際に本郷の住民の方々と話してもいいですが、東大は伝統的にあまり地元を重要視してこなかったという話しか、今

のところ聞こえてきません。

○堀内 このトピックは考古学全体にも言えることでしょう。というのも、考古学者と一般との相互交流には大変なハードルがあるのです。確かに考古学側から発信するにはさまざまな手段があります。博物館や企画展、土器作り、親子教室、火起こし、勾玉などです。ですが相互交流となると、松方先生がおっしゃられたネットワークを意識的に構築する必要があるのでしょうか。

ただし考古学に向けられる潜在的興味は極めて高いように感じています。私たちは総合研究博物館で2000年には「加賀殿再訪」という展示を、2017年には「赤門展」という展示を行いました。「加賀殿再訪」はごく短期間でしたが、こんなに人が入ってくるんだ、と感動するぐらいでした。一日当たりの総合研究博物館来館数は「加賀殿再訪」が一番だと言われました。その後、赤門展も非常に多くの方が来館されております。また、アカデミックコモンズの現地説明会やったんですけど、長蛇の列で最後尾は二時間待ちという状態になりました。これらも潜在的興味を示す例でしょう。にもかかわらず、やはり発信の仕方が確立されていないように思います。

私も、1990年代にアユタヤの発掘調査に行ったことがあります。オランダが資金を出し、オランダとタイの考古学者が共同で発掘しました。当時はオランダ商館の中に住んでいる人がいて、商館が使っていた栈橋を自分の船の滑り止めに使っていました。そういう状態から現在の形にできたことに感心しています。オランダ商館の隣が日本人町ですが、そこにはトイレのようなコンクリートの建造物が一つあるだけだったのは残念でした。他方で、私は発掘後に建てられた博物館はまだ見ていませんけれども、松方先生からタイの方が誇り高く活動されていると伺いうらやましく思っています。

○松方 タイ史の大家である石井米雄先生がアユタヤの日本人町の調査に参加されたとき、タイの日本人協会が資金を出してくれたのだと記憶していま

す。ですが、出資した企業の方は、山田長政を顕彰することにしか関心がないので、石井先生はただ一人で奮闘されたそうです。それと比べてみると、オランダ研究側のチームワークぶりがうらやましいように思います。日本人研究者も個人では頑張っているのですが、なぜチームにならないのでしょうか。松田先生も一人でインタビューをされているそうですし…。今回の研究会が、研究を共有する方向に流れを変えるきっかけになればよいと思います。

○M 東京は2020年に向けてグローバルをみえていますけれども、地方では、地方創生ブームです。地方の行政、研究者、地場産業の方たちにとっては、地域固有の文化資源を再構築し、グローバル化させるために尽力することが今一番志向されています。

この観点から見ると、本来であれば東大はその潮流を率先する社会的役割を担われます。もちろん文化資源学研究で諸先生方が取り組んではおられるのでしょけれど…。

大名屋敷は多数ありましたが、その史跡が調査研究されて文化資源として活用されているのは東大だけだと思います。クイズ番組などに東大の学生さんたちが出場するときには、その背景には赤門がアイデンティティーとして映し出されます。こういう光景はハーバード大にもケンブリッジ大にもないものだと思います。その魅力をグローバル化とローカリゼーションの両方に活かせるのではないのでしょうか。私の研究分野では、アルフレッド・マーシャルはある特定分野の産業関連組織と帰属人材が一定地区に集積する外部効果を問いましたが、多様な人が集まる場所や組織に注目するという点では、ジェーン・ジェイコブズやリチャード・フロリダらが唱えた創造的人材が集まる多様性と開放性に富んだ場でしょうか。多様な創造性に富んだ場、その典型例が大学です。まさに東大では様々なシンポジウムが日常的に行われ、卒業生だけでなく各界の第一線で活躍されている方たちや意識の高い住民が来られて、いつも満席状態であると感じられます。

ただし、専門分野を横断する個々のフラットなネットワーク形成という点では、京都に学ぶところがあるように思います。京都ではサロン（カフェ）スタイルの集まりが発達しており、小さなそして自由に議論されるワークショップがよく行われます。専門分野が異なる多様な人たちが集まる場からイノベーションや伝統の継承が醸成されるようです。伝統産業である陶磁器メーカーから世界の企業に発展した京セラや、村田製作所は、その代表例でしょう。

○鈴木 ここまでの話にいくつかコメントさせてください。まず加賀藩と東大の関係に関してです。去年の春に明治維新百周年企画として金沢に行って、加賀の明治維新という話をした際、「なぜ加賀藩では明治維新で活躍した人がいないのか」という質問を受けました。その質問に私は、「日本の近代化という点で言えば、学問の世界などでは加賀藩出身者はかなり活躍している」と答えました。初期の帝国大学では加賀藩出身者がたしかに多いのです。とりわけ理系に多いので、あまり目立たないのですけれど。

ここでふと浮かんだアイディアなのですが、もしかすると、加賀藩出身者が多くいたことが、赤門が保存されたことにつながったのかもしれない。そういう話が伝わっていないのは、「僕は加賀藩出身だから赤門を守る」とか「守った」とは言えない帝国大学の雰囲気のためでしょうか。近代の東京大学はグローバル化に方向付けられてゆくのですが、そこに彼ら加賀藩出身者の秘めた思い—屈折と言うべきでしょうか—があるとすると面白いでしょう。ただこのアイディアを歴史家として実証するのは難しいのですが…。

他方、東大のグローバル化については今日のご発表で新しい段階に入ったように思いました。東大がグローバル化していたという話は、数々のお雇い外人の銅像や、繰り返されるお雇い外人の企画展によって単線的には語られてきたでしょう。しかし—松田先生は意識して話題になさったのだらうと想像しますが—モースが蛇塚について書き留めていると知ると、蛇塚を見て「モースがそ

の隣に住んでいた」という実感が湧いてくる。このリアリティーは、今までのお雇い外人についての語りではまったく出てこなかったものです。

○M 個人的な見解から補足させていただきますと、前田家は徳川家や親藩譜代大名とは親戚関係にあり、本郷邸や加賀邸の何れも水戸、紀州、福井（松平）の御目付もあって、明治維新の時には、加賀藩は容易に動けず、またそのような活動も藩内で活発化しませんでした。加賀藩が持続的に存続するためにも、朝廷と幕府の何れかに積極的につくという行動は即座に取れなかったのでしょう。一方、明治維新で活躍された長州、島津の両藩は、藩校での藩士教育が早期より発達していて、様々な要因も加わって倒幕体制が整われたのだと思います。

ところが、明治維新以降、石川や富山の出身で東京大学に入学される偉人・著名人は多いようです。彼らの多くは、イギリス、ドイツ、フランスに留学されて、その後に政経界で活躍されています。

東京大学の「門戸開放」

○鈴木 近世以外についても質問やコメントはありませんか。

○森本 東大文書館の森本祥子と申します。埋蔵文化財ではないのですが、大学の文書の移管を受ける仕事をしています。

地域との連携という話が出ましたが、東京大学の文書の残り方からは、あまり地域との連携や交流に熱心ではなかったことが窺われます。地域連携関係の文書は、数年分でようやく一冊ぐらいある程度に過ぎません。他大学の文書館関係者の方とお話ししていると地域連携関係の文書について質問を受けるのですが、「無い」というのが当館の通常の答えです。

このことの良し悪しはさておき、これが東京大学の特色であるように思っています。ほんの一、二冊だけですが、赤門の守衛さんの日記が文書館にあ

り、総合研究博物館で開催された「赤門展」では展示していただきました。そこに書かれている記録には、子どもが何人か入ろうとしたのを追い返した、というように不審者をすべて追い返しています。ですので、少なくとも大正時代には、今のように外部の人が東大構内に勝手に入って散歩することはできなかった。それがいつ転換したのか、またそれがどこかの文献に記録されているのか、ということに興味を惹かれています。

先ほど、イギリスなどの大学と違って東大にはシンボリックな赤門がある、という話がありました。言い換えると、ここはそもそも大名屋敷で、外部の人間が入れない所だったわけです。それをそのまま丸ごと大学にしたために、外部の人と壁があるエリアになったのかもしれませんがね。一方で、ケンブリッジやオックスフォードでは、町の中に大学の建物が散在していますよね。大学の理念面だけではなく、地理的な特性も長年積み重なって、地域と大学との関係ができてきている部分もあるのかなと思います。

○松田 東京大学が一般に門戸を開いたのは、戦後ではないでしょうか。本郷に住む年配の方々にインタビューしていると、昔は構内に入ろうとしたら守衛さんに止められて追い返されそうになったが、それをかいくぐって中に入って三四郎池で泳いだ、といった話をよく聞きます。今では、観光客も本郷キャンパスの中に入ってきますし、ウォーキングクラブの会員のような方々も来ますし、修学旅行や遠足の生徒さんもやって来ます。劇的に東京大学の性格を変えたターニングポイントがあるのでしょうか。この変化の意味と意義が語られていないことを私も常々不思議に思ってきました。

○鈴木 記憶が定かではないのですが、キャンパスが原則として一般に開放されたのは、21世紀に入ってからのように思います。ただ、私が本郷に進学したときも、やはり関係者以外立入禁止と掲示されていたながら、外部の方が入ってきていました。おそらく、東大紛争後に一時期、学外者が入ることの

規制を強化したのではないのでしょうか。

○堀内 本郷キャンパスには、附属病院がありますから、入構制限が緩い感じがします。私ども埋蔵文化財調査室は、本郷で発掘調査していますけれども、駒場キャンパスにオフィスを置いています。駒場キャンパス、第2キャンパスともに守衛さんがいて、以前は外部の人が全く中に入れませんでした。一般に門戸が開かれたのは、それこそ21世紀に入ってからでしょう。

○鈴木 ということは、比較的新しいところにこの政策決定をした文書があるのでしょうか。

○森本 楽しみにして、探します。

近代考古学に向けた展望

○鈴木 私は近代史を専門としており、富岡製糸場や新町紡績といった近代の史跡の保存に関わっていますので、お伺いしたいことがあります。先ほど動物学教室の基礎のところを調査のために壊してしまったというお話がありましたけれども、明治以降に埋蔵された東大の近代遺跡の保存について現在の埋蔵文化財調査室に何かポリシーがあるのでしょうか。近世の遺跡として対比して、お聞かせください。

○堀内 技術面と今後の方向性という二つの側面からお答えします。技術面から言うと、上の面や層に大きな煉瓦が乗っている状態はその下層の調査を行っていくです。幸い東大中心部は台地の頂部に遺跡が展開していますが、病院地区の場合は、煉瓦基礎が三、四メートルも深く沈み込んでいます。その煉瓦を壊すと他の遺跡も壊されてしまうという技術面のハードルがあります。

次に今後の方向性という面について言いますと、そもそも埋蔵文化財調査室は近世の発掘調査を中心としてきた組織であり、大学前史を対象としてきました。ですから大学時代のもは発掘調査の対象外でした。例外的に近代遺跡である懐徳館の調査ができたのは、大学ではなかったからです。一方、大学内の近代遺跡については、着手できないでいました。今後の方向性としては、先ほど鈴木先生がおっしゃられたように、近代遺跡保存についても踏み込んでいく必要があると個人的には思っています。たとえ建物が壊れて基礎しかないとしても、わたしはそれが残っていないとは考えていません。しかし保存をどのように実行するかについては、検討する必要があります。現存の建物を解体する場合には、すべてについて3D測量を行って情報を未来に残していくべきだろうと思っています。文書館との関係も考慮する必要がありますでしょうが、埋蔵文化財調査室がそうした情報を残してゆく組織の一つになってゆけると良いですね。

○鈴木 確かに、物が大きいだけに邪魔にはなりますよね。

○堀内 近代遺跡についても、旧図書館のダイナミックな煉瓦が出土してインパクトを与えて以来、学内の雰囲気が変わってきています。むしろ、僕らがこれまでやっていた加賀藩邸のほうが置き去りにされている感さえあるのですけれども…。図書館前に加賀藩の藩邸時代の石をスライスしてはめ込まれています。近い将来あそこに看板を立てる予定ですので、目立たないですけど見てやってください。

○鈴木 工学部三号館の下から出土したコンクリートの、大変に太い杭も、技術史上重要なものかもしれません。ですがそれにどういう価値があるかという、近代史分野ではまだ検証されていないどころか、誰に聞けば良いかさえわからないような状況です。ですので東大には多様な地下遺構の形が出

てきているにもかかわらず、その研究が全然進んでいない。もしかすると非常に貴重なものを壊しているのかもしれない。今まで東大が近世考古学を築いてきわけですから、難しいかもしれませんが、工学部の土木建築分野とも協力して学内で近代考古学が行われるようになって欲しいと願っています。とは言っても、あの杭を残すのは無理だったとは思いますが…。

今日のお話を伺って、弥生遺跡の再発掘から東大の埋蔵文化財調査が始まっているという事実を再認識するとともに、大いに示唆を受けました。東大にあった弥生時代の発掘品それ自体は学術的価値が高くないものであっても、それから日本の考古学と近世考古学が始まったという考古学史の二つのエポックをなしているわけです。このような学問史上の価値と遺構そのものの価値をどのように考えてゆくべきでしょうか。これは制度に回答を求められない問いであり、それを考えるのは大学の仕事です。この問いについて考える上で、東大の埋蔵文化財調査は、良質の素材であることを、あらためて感じました。これは、先ほどの松方先生がおっしゃったタイの博物館の話に関わってくるのかもしれない。

また松田先生のお話に出てきたucodeのように、今やなんの情報も与えないものが堂々と文化財に干渉する場所に立っている状態については、歴史研究者として重く受け取らなければならないと思いました。自分を振り返ってみると、遺構の価値を伝えたいところまでは思い至るのですが、そこで行ったプレゼンテーションがどう見られているか、と視点を転換するのはうまくできてきませんでした。失礼かもしれませんが、ようやく文化資源という学問の面白さを実感したところです。同時に、これだけの素材がある場所で我々が何をやっていくかが問われていること、前例を作ってゆかなければならない責任があることを感じました。

今回、分野を超えてお話して私としても得るところがありました。この成果をこれから膨らましてゆきたいと思います。本日の研究会はここで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

参考文献

井上幸治編

[1989]『フェルナン・フローデル：1902-1985』，新評論，東京.

岩淵令治

[2004]『江戸武家地の研究』，塙書房，東京.

江戸遺跡研究会編

[2001]『図説江戸考古学研究事典』，柏書房，東京.

小川一真

[1900]『東京帝国大学』，小川写真製版所，東京.

鈴木尚・矢島恭介・山辺知行編

[1967]『増上寺徳川將軍墓とその遺品・遺体』，東京大学出版会，東京.

坪井正五郎

[1889]「帝国大学の隣地に貝塚の跟跡有り」，『東洋学芸雑誌』6(91)，
195-201.

東京大学キャンパス計画室編

[2018]『東京大学本郷キャンパス—140年の歴史をたどる』，東京大学出版会，東京.

東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編

[1988]『東京大学本郷キャンパスの百年』，東京大学総合研究資料館，東京.

東京大学文学部考古学研究室編

[1979]『向ヶ岡貝塚：東京大学構内弥生二丁目遺跡の発掘調査報告』，東京大学文学部，東京．

都立一橋高校内遺跡調査団編

[1985]『江戸：都立一橋高校地点発掘調査報告』．

中川成夫・加藤晋平

[1969]「近世考古学の提唱」，『日本考古学協会第35回総会研究発表要旨』，27．

濱田耕作

[1922]『通論考古学』，大鏡閣，東京．

濱田純一

[2014]『東京大学—世界の知の拠点へ』，東京大学出版会，東京．

林屋晴三

[2002]「古九谷論争の軌跡と伊万里初期色絵」，東洋陶磁学会編『東洋陶磁史—その研究の現在—東洋陶磁学会三十周年記念』，東洋陶磁学会，東京，192-198．

古泉弘

[1990]『江戸の穴』，柏書房，東京．

三上次男

[1972]『有田天狗谷古窯』，有田町教育委員会，佐賀．

宮崎勝美

[2008] 『大名屋敷と江戸遺跡』, 山川出版社, 東京.

モーリス, E. S.

[1929] 『日本その日その日』(石川欣一訳), 財団法人科学知識普及会, 東京. 全二巻.

山崎一雄

[1993] 「江戸前期の色絵磁器の化学分析—東京大学医学部付属病院地点と山辺田二号窯址付近出土の破片—」, 『東洋陶磁』 20・21, 79-84.

Morse, E. S.

[1886] *Japanese Homes and Their Surroundings*. Ticknor and Company, Boston.

[1917] *Japan Day by Day*. Houghton Mifflin Company, Boston and New York. 2 vols.

本文中の梵字表記には, ApDevaSiddhamEx Ver.1.50 (<http://azahuse.web.fc2.com/sansc.html>) を使用した。